

## ★漢方あれこれ★

## ◆ 扁 鵲 ◆

中国における名医の代名詞とされる医師

太田 順康

紀元前500年頃の春秋戦国時代の人。漢方の聖典とされる傷寒論を著した張仲景がその序文で「越人の虢に入るの診、齊侯の顔色を望んだ逸話を知るたびにその才能の秀でたことに感心しています。」と言わしめた名医です。

若い頃仙人と思われる長桑君に認められ、医方のすべてを授けられたと言われています。その結果外から見ただけで病人の内臓の様子が判ったそうです。レントゲンのような目を持っていたようです。

「虢に入るの診」とは扁鵲が虢の国に入ったとき、国中が太子が死んだと歎き悲しんでいました。扁鵲が診たところ「尸厥といって形は静かで死んだようになっているがまだ死んでいない状態」だったので、鍼で気血の流れを整えると、太子は蘇生した、薬湯を調合して両脇の下に貼り、気血の流れを良くし、陰陽を調和させることで、太子は回復したという故事。

「齊侯の顔色を望む」とは扁鵲が齊の国に入り、主の桓侯に謁見した時に、君には腠理に疾があります。早く治療しないと病が深くなりますと言上した。桓侯は私は元氣だ。医者は無角病気にしたがると取り合わなかった。5日後桓侯に謁見した

扁鵲は疾が血脈に在ります、早く治療するよう勧めた。桓侯は勿論取り合わなかった。その5日後また桓侯に謁見して望み疾が腸胃に入りました。早く治療しないと

大変と勧めたが桓侯は取り合わなかった。また5日後の4度目の謁見のとき扁鵲は黙って退室しました。桓侯は不思議に思い訳を聞かせました。疾が腠理にあるときは湯薬などで治す事が出来、血脈にあるときは鍼などで治療でき、腸胃にあるときは酒醪で治療できるが、今の桓侯のように骨髓に入ってしまうと治療のしようが無いと、説明しました。5日後桓侯は病になり、扁鵲を呼びにやりましたが、すでに国外に出た後で、桓侯の病は治らず死亡したという故事です。↗



扁鵲の診察



## 春禪洞

## すこやか教室 山歩き

◎10:30 出発です。

雨が多く気温の低かった4月の日々が一転、夏を迎えたよう。気温の変化に驚きました。体調はいかがですか。寒暖の差はまだ続きそうな気配、気をつけて暮らしましょう。

戸外では、じっとしていた若葉がぐんぐん繁り、虫たちも動き始めました。やわらかな緑の中を歩きながら、見つけること想うことはたくさんです。

1日(金) 8日(金) 29日(金)

(15日、22日の山歩きは都合により休みます)

## § 漢方

(担当 太田順康：日本漢方交流会認定漢方終身師範。  
岐阜県漢方研究会会長。岐阜薬科大学「漢方学」講師)

今月の漢方相談日

7日(木) 11日(月) 25日(月)

## § 5月の休診日

4日(祭日) 15日(金) 18日(金)



太田先生の  
「くらしの  
薬草と漢方薬」

新日本法規出版  
B5版・総頁382頁  
価格 3,300円+税

扁鵲は各地を遍歴し、帯下医(婦人科医)や小児医になって活躍していたようですが、彼の才能に自分が及ばないと知った秦の大医令の李醜によって暗殺されてしまいました。このように顔色を見て病気の状態を知ることが望診とって、漢方の診察法の大切な要素です。舌の状態を見たり、顔色や、唇の色を見ることで薬の選定に参考になることが多いものです。勿論扁鵲のようにはいきませんが。(つづく)